

ザッハ・トルテ

僕は渋いワインを飲んでいた
できうることならこのまま、ここで眠ることがきたら・・・

この頭の重さ、気分の悪さ
そして何よりもこの空腹感に胸やけがする

この街の温厚な懐の深さにも吐き気がする
母親面したこの押しつけがましい甘さときたら！

僕は自分が椅子からずり落ちそうになる度に
テーブルの縁につかまって己を引き上げねばならなかった

それはたまらなく辛い作業だった
恐らくは遠いつくばってこの店を出ることよりも

そうなのだった
こここそが我が故郷なのだ

私を自由の中へと解き放ち
虚無の中で私の渴望をかき立てるよう仕向け

生という媚薬の中に私を漬け込んだ拳句に
「生活」という単調へと私を連れ戻した故郷なのだった

ああ、ここで私に何を生きろというのか
水を失った魚のようなこの私に？

逃げ去ることなど決してできないと笑うのか
然り、私は逃げ去ることなど決してできないのだ

この渋いワインのような安物の「生活」というやつ
こいつを飲み干してしまわない限り扉は開かないのだ！

そうなのだった
ここが私の故郷なのだった

そして私はここに居て蒼白な頬を押さえ

倒れ伏して吐くこともできないでいるのだ

何故なら、こここそが
こここそが私の故郷であるからだった

(1990.3.4)